

平成25年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

世界史必履修となっている高等学校地理歴史科の教育課程において、科目構成や履修形態を改め、教科の趣旨やねらいを踏まえた新しい必履修科目を設置し、その学習の内容と方法について研究開発を行う。

2 研究の概要

地理歴史科目を構成する世界史，日本史，地理の3領域を再編成し，高等学校1年生に「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」の2科目を必履修科目として設置し，地理歴史科の趣旨やねらいを踏まえた学力の充実を図る。

- ① 世界史必修，日本史・地理の選択必修に代わる2つの新科目を教育課程上に設置するとともに，地理歴史科の科目構成や履修形態を検討する。
- ② 新科目の学習内容や方法について研究し，単元構成や年間指導計画を作成する。
- ③ 新科目の評価のあり方やカリキュラム改革および実施上の課題について検討する。

具体的には，地理・歴史の総合的な観点から学習させる時代や地域を設定し，地理領域および歴史領域（近現代史）から，グローバル的・ローカル的な両視点を組み合わせた学習内容と生徒の協同学習（課題探究活動）を通して思考力の育成を図る。そのため，世界史・日本史・地理の3領域を統合した新たな観点で使用教材の作成を検討する。

3 研究の目的と仮説等

(1) - 1 研究目的

高等学校の地理歴史科の必履修科目として求められているものは，世界および日本の現状と歴史の概略を理解し，将来の世界・日本のあり方に主体的に関与する能力を身につけさせることにある。

中学校での既得知識から高等学校での新知識の積み重ね・連続性という点から，地理・歴史・公民の3領域は必履修とすることが望ましいと考える。その視点に立ち，以下5つの目的を設定した。

- ① 高等学校の地理歴史科の必履修科目として「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」の2科目を設置し，その学習内容や方法等について研究することを目的とする。あわせて，学校や生徒の状況に応じて共通性と多様性のバランスに配慮した特色ある教育課程の編成を進める。
- ② 「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」の履修を通じて，生徒一人ひとりに現代世界と日本に関する基礎的な知識と，資料活用能力，地図・写真等の地理的的技能等の育成を図る。
- ③ 地理・歴史の総合的な観点からの学習を通して，グローバル的・ローカル的な両視点から，現代の世界の動向を思考する能力や理解する能力・表現する能力の育成を図る。
- ④ 「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」の履修と関連する他教科内容を通じて，自然環境や生活文化および歴史的事象の理解を深め，培ってきた知識を基に国際人として，現代社会で活躍する生徒を育成する。
- ⑤ 「地理基礎」は地理Aとの違いを検証していきながら，基礎科目として「地理基礎」のあり方を，「歴史基礎（近現代史）」では地理と歴史の関わりを深めながら，世界史A・日本史Aを組み込んだ新しい科目としてのあり方を検討する。従来科目ではできなかった世界史・日本史・地理の横の繋がりを持たせた新科目として，全国の高校で活用できるよう提示する。

(1) - 2 研究仮説

地理歴史科に必修となる「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」を教育課程上に新たに置くことにより次のような効果が期待できる。

- ① 地理歴史科のねらいを踏まえた基礎的な知識の定着により、国際社会の中で主体的に物事を考察できる思考力の育成を図ることができる。
- ② 地理および歴史の双方の科目を必修とし、時間軸と空間軸のバランスのとれた学習を保障することにより、時間軸と空間軸に沿った知識の統合的理解を深めることができる。
また地理と歴史の教員がそれぞれの専門性を活かした教育研究を効果的に進めることができる。
- ③ 地理歴史科の教員で学習内容の共有を図ることにより、学習内容に深みと広がりを持たせることができる。このことから生徒の興味関心を高め学習意欲を向上させる授業を展開することができる。
- ④ 「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」の上に、次年度以降、世界史・日本史・地理の専門科目を置くことにより、共通性と多様性のバランスに配慮した、特色ある教育内容を編成することができる。
- ⑤ 新科目の新設により、大学等における地理歴史科教員の養成、任命権者による採用に好影響を及ぼすとともに、指導の内容や方法の工夫と改善等を通じて学校における人材育成を適切に進めることができる。

(2) 教育課程の特例

必修科目としての世界史A・Bを教育課程から削除し、新科目「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」の2科目を必修とする。世界史B，日本史B，地理Bは，2年次以降の選択必修とする。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

- ① 「地理基礎」および「歴史基礎」の実施した授業単位数については、次の通りである。

地理基礎 歴史基礎	平成23年度（1年次）	平成24年度（2年次）	平成25年度（3年次）
実施単位数	各3単位	各3単位 *	各2単位
実施学年 クラス	高校1学年 1クラス (難関大学進学クラス) 他4クラスは、地理A・世界史Aを実施。	高校1学年 5クラス	高校1学年 5クラス
その他	学習内容の時数的な余裕の確保が可能。 ①グループ討議や発表は単元ごとに実施。 ②調べ学習の時間は1テーマに4時間程度を割り当てる。 資料点検やレポート作成のための時間を十分にとることが可能。	授業2単位。 (*1単位分は授業と完全に分けて生徒の課題研究・発表・討議等の表現力育成のためのグループ活動に充当。)	生徒の課題研究・発表の時間確保および討議等の表現力育成のためのグループ活動時間に苦慮。

(グループ活動は協同学習の一貫)

② 「地理基礎」および「歴史基礎」の目標と実践

ア 「地理基礎」

「地理基礎」は、学習の基礎となる一般社会へ巣立つ際の最低限の知識・スキル、考え方の習得を目指し、中学校での学習内容の接続を図るとともに、大学進学に偏らない進路に対応した内容とすることとした。

○ 学習内容

- ・現行の「地理A」と同じく、グローバルなスケールと生活圏（身近な地域）のスケールという2つの視点から学習充実を図る。
- ・中学地理で学習した地誌(日本と世界)、系統地理的な知識や見方を活用して、現代の世界的課題や身近な地域の課題に興味を持てるような「課題探究学習」を進めていくこととする。
- ・「地理A」で重視している地域調査や地図の読み取り等のスキルに加え、社会参画を強調し、地理的思考（空間的思考）を基礎としながら現代的課題を解決する地理的知識やスキルの応用を取り入れていく。
- ・人間生活との関連を重視し、適切な事例地域を取り上げることで、生徒の興味関心・意欲を喚起する。

○ 「地理基礎」の実践

- ・地理Bにおける系統地理の学習内容を確保しつつ、生活や文化、農業等、人間生活との関わりを重視した学習により多くの時間を取って、地理的な技能、地理的な見方を養うという指導を行った。
- ・写真資料の有用性を鑑み、提示した写真からその地理的事象が人々の生活とどのようにかわるか、歴史的にどのような背景をもって形づくられてきたか、「人々の生活」や「事象の変化」を読み取らせることにも重点を置いた。
- ・生活圏の諸課題については、中学校までの身近な地域の学習の成果、2学期前半までに習得した系統的な知識および地理的スキル、地理的な見方・考え方を踏まえ、より広域的な視点に立って探究的、問題解決的な学習を行うことを目標に指導をした。

イ 「歴史基礎」

「歴史基礎」では、これまでの高校歴史教育における世界史と日本史の分断状況を克服し、世界史と日本史をバランスよく組み入れたグローバルな歴史として学習の充実を図っていくこととした。近現代史の基礎学習を重視したのは、現代社会の様々な地域の独自性やその相互過程を理解し、世界で起こる事象や抱える諸問題を考察できる力を育成するためである。

○ 学習内容

- ・中学歴史分野で学習した日本と世界の歴史、地理的な知識の活用と公民分野の政治経済等の既得知識との繋がりに配慮した。
- ・世界史・日本史の関連づけと地理領域との相互関連の視点から学習内容の充実を図った。歴史的な事象と地理、世界と東アジア地域という関係性に焦点を当てながら学習を展開させた。
- ・「歴史基礎」で学習する内容から、時代を大観する歴史的思考力と、現代に起こっている事象を理解する歴史的な考察方法（歴史的な見方や考え方）を身につけられるよう配慮した。
- ・従来の知識偏重の学習を改め、歴史的思考力の育成を図るという点から主題学習、協同学習（課題探究活動）、資料の解説等の学習機会を増加した。
- ・具体的な歴史基礎の教育内容については、時系列型に近現代に集中した学習とした。地理的視点の重要性を鑑みて、学習内容の随所に関連する地図を活用し、「グローバルな視点」・「ローカルな視点」の両面と「地図から見た歴史」の三方向から「歴史」を考察する力の育成を図った。

○ 「歴史基礎」の実践

- ・世界史Bの教科書を参考に歴史的事象の要点を抽出し、そこに日本史領域の内容を組み込むと同時に地理的領域を加味し、煩雑にならないように学習内容の精選を心がけた。
- ・歴史的事象の縦横関係にストーリー性を持たせ、興味関心を喚起させる工夫をした。
- ・提示する資料やワークシートは視覚的に理解し易いように配慮を加え、歴史的事象を立体的にイメージできるよう心がけた。
- ・近代～現代社会の抱えている諸問題を思考・考察する力を養成するよう指導を実施し、現代世界で起こっている事象等と関連づけながら授業を進めた。
- ・主題学習、協同学習（課題探究活動）資料解読等の学習を通して、「歴史的事象」と「地域（国）の特殊性・民族の文化」を考え話合う機会とそれを伝え合う時間を多く取り表現力育成を図った。

③ 基本的方向性

中学社会の3分野の知識の上に、基礎学力の育成を図るという基本的な考えを中心に据え、その実施のために授業項目の焦点化を行った。「地理基礎」および「歴史基礎」の学習では、生徒の学習内容に関する興味関心を引き出し、地理歴史科科目への取り組む意欲を向上させるとともに苦手意識の払拭を試みることにした。また、現在の世界で起こっている事象に興味を持って理解し調査しようとする姿勢の育成を図るため、以下に重点をおきながら実践を行った。

ア 基礎学力とは何かという定義の検討。

イ 興味関心を育て、調査方法・探究型学習を身につけるために、学習内容に沿った主題学習・協同学習（課題探究活動）・レポート作成等を実施する。

ウ 表現活動を重視し、調査した項目や作成したレポート等の発表を行う。

エ 現代社会の世界的な事象や課題と関連させながら、地理的・歴史的領域の基礎学力向上に留意する。

従来の学習形態の「授業で学ぶ」から「授業で学び、得た知識を基にして自他の考えを伝え合う。協同学習等で得た知識や技術・考えを自分の中で再構成する。」形態の学習へ…を実施し協同学習（課題探究活動）による理解の深まり・知識の定着を図った。

(2) 研究の経過

第一年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「地理基礎」「歴史基礎」の学習内容や方法、単元構成の研究。 ・専門的知識を有する方・学識経験者の方々からの意見を踏まえて、研究発表会や情報交換会を開催し（二年次・三年次同様、以下略）、学習内容の再検討を図る。
第二年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「地理基礎」「歴史基礎」の授業を2単位で実施、グループ活動を中心とした授業を1単位分に充当。（（1）教育課程の内容①参照） ・年間指導計画の作成・地理歴史科科目の単元・学習内容・配布するプリント等の再検討と修正。 ・研究発表会にて講演会や地理基礎・歴史基礎に関するシンポジウムを開催。 <p style="text-align: right;">（三年次も同様）</p>
第三年次	<ul style="list-style-type: none"> ・二年間の成果を踏まえて、課題の抽出と見直し・改善等を図る研究。 ・「基礎」とは何か、地理歴史教育が担う思考力とは何かの研究継続と研究仮説の検証と結果を発表する。 ・地理歴史教育の研究、教育課程における教科編成のあり方を考察。 ・地理と歴史の関わり、「地理基礎」のあり方、世界史A・日本史Aと「歴史基礎（近現代史）」のあり方をさらに探求する。

【研究計画等】

① 平成23年度の研究開発の概要

学習指導要領との関連を考慮し、地理基礎・歴史基礎の学習内容や方法、単元構成の研究を行う。本校のカリキュラム上、地理基礎・歴史基礎は3単位、高校1年生1クラスで実施し、他の4クラスの学習内容状況・興味関心等について比較した。

専門的知識を有する方・学識経験者の方々からの意見を踏まえて、中間報告会（6月：地理基礎の研究授業発表、9月：歴史基礎の研究授業発表）、公開研究発表会（11月：地理基礎・歴史基礎の研究授業発表）を実施した。あわせて運営指導委員会を年3回開催し、学習内容・方法、地理基礎・歴史基礎の方向性の検討を行った。

② 平成24年度の研究開発の概要

地理歴史科を構成する世界史、日本史、地理の3領域の学習内容を再編成し、「地理基礎」「歴史基礎（近現代史）」をカリキュラム上3単位で実施した。ただし、授業は2単位で実施。1単位分は、生徒の調べ学習および表現活動に活用した。全高校1年生5クラスに実施した。2年目としての研究成果を検証するため、専門的知識を有する方・学識経験者の方々からの意見を踏まえて、中間報告会（6月：地理基礎・歴史基礎の研究授業発表）、公開研究発表会（11月：地理基礎・歴史基礎の研究授業発表・講演・シンポジウム）を実施した。あわせて運営指導委員会を年2回開催し、学習内容・方法、地理基礎・歴史基礎の方向性の検討を行った。地理歴史科目の学力の充実を図るため、次のような内容に取り組んだ。

ア 地理歴史科の科目構成や履修形態を検討し、単元構成や年間指導計画に修正を加えた。

イ 研究目的に添った単元構成の再検討と使用する教材やプリント等の作成について、さらに、生徒の活動時間（協同学習）の確保とその積み重ねの必要性等について、検討を加えた。

ウ 学習内容の要点の精選と活用資料の収集・精選について検討を加えた。

エ 評価のあり方や実施上の課題について検討を加えた。

③ 平成25年度の研究開発の概要

研究開発の科目指定が2単位履修であるので、「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」を各2単位で履修、全高校1年生5クラスで実施した。最終年度として、学習内容のさらなる検討とカリキュラム上や実施上の問題点・課題を提示していくために、中間報告会（6月：地理基礎・歴史基礎の研究授業発表）、公開研究発表会（11月：地理基礎・歴史基礎の研究授業発表・講演・シンポジウム）を実施した。あわせて運営指導委員会を年4回開催し、研究開発の内容・方法、方向性の検討と課題の抽出を行った。学習内容についての留意点は次の通りである。

ア 中学校社会科の学習成果を踏まえた学習内容を構成するとともに、高等学校2年次以降で選択する世界史、日本史および地理の学習が効果的に進められるように、配布プリントへの工夫と内容の精選を行うと同時に、視聴覚教材の有効利用方法の検討を行った。

イ 学校や生徒の状況に応じて、学習内容を編成。段階的・継続的に学習し理解が深められるよう授業を構成していった。また、国際社会の中で主体的に物事を考察できる思考力の育成を図った。

ウ 具体的な観点として a「地図表現の充実と実生活との関連」 b「自然環境と人類のかかわり（と民政史）について」 c「世界史と日本史の繋がり、事象から事実を積み上げて論理的に思考する能力」 d「グローバル的視点（世界）、ローカル的視点（日本・地域）からみた歴史的事象」 e「資料から読み取る事象の変化」等に着目した。

エ グローバルな視点から、「世界」「日本」を捉え、地理的・歴史的な特色とその関連性、歴史的経緯等を重視した学習を展開するよう配慮した。特に、近現代における列強諸国とアジア諸国との関係性を重視した学習は、現代社会を生きている生徒に「今・何故」を考察する態度を身につけさ

せるよう配慮を重ねた。

オ それぞれの国や地域，その特有の文化とそこに繰り広げられる人々の生活への理解と繋がりに対して，尊敬を持って学ぶ国際人としての姿勢を培うよう配慮を重ねた。さらに，各国・各地域の文化や風土を地理的・歴史的な特色から理解する事例やエピソードを学習に取り入れていった。

カ 上記イエオを実践していくために，協同学習による課題探究活動を授業に多く取り入れ，思考力・表現力の育成と基礎力の定着を図った。

キ 地域調査および博物館の資料や研究内容等の情報収集のための調査を実施し，教材研究の裏づけと教材作成に活用していった。

(3) 評価に関する取組

第一年次	・研究発表会を通して学習内容・方法に関する評価を有識者により実施。 ・生徒の意識・興味関心に関するアンケート等を年2回（5月・2月）実施。 ・学習内容の定着度を定期試験や生徒が取り組んだ課題・表現活動等から検討。
第二年次	・研究発表会を通して学習内容・方法に関する評価を有識者により実施。 ・高校1年生へ新設科目の全面実施に伴い，生徒の意識・興味関心に関するアンケートを改良，年2回（9月・2月）実施し，生徒の意識変化を考察。 ・学習内容の定着度や思考力を定期試験や生徒が取り組んだ課題・表現活動等から検討。
第三年次	・地理歴史科科目に関する生徒の意識・興味関心に関するアンケートを年2回（9月・2月）実施。生徒の意識変化を観察し考察。「地理基礎」「歴史基礎」科目への意欲等を授業および協同学習時の発言・課題への取り組み・定期試験の結果を総合判断する。 *今後も「地理基礎」「歴史基礎」科目を通して培われた思考力や表現力等を検証する方法を検討していく。

【評価について】

① 地理歴史科の関係教員による各学期ごとの総括会議を実施し，指導上の課題等について協議を重ねる。

② 学習内容（单元ごと）における学習状況，授業中の発言，発問に対する応答，授業への積極性等を観点ごとに総括する。



中間試験及び学期末試験における学習内容の習得度。

提出された課題・生徒の活動を観点ごとに総括する。

学期末の評定へ



学年末に学習状況・成績等を総合判断し，観点ごとに総括する→学年末の評定へ

*観点ごとの総括は3段階表示し学期末の評価に反映させる。（観点は下記参照）

A 十分満足できる B おおむね満足できる C 努力を要する

*中間試験及び学期末試験での成績表示は10点法とする。

③ 高校1年生に年2回，学習アンケートを実施し，地理・歴史学習への関心・意欲や理解度を測り，生徒の意識変化を検証する。

④ 生徒が取り組んだ学習課題・レポート・討議発表・感想等から，新科目履修により培われた表現力，思考力等について総合的な判断による評価の点数化を行い，「地理基礎」および「歴史基礎（近現代史）」の学習がもたらす結果を検証する。

⑤ 大学等の研究者・教科書執筆者，および高等学校の地理・歴史教育研究会等の委員により，新設科目の教育効果や教科書作成上の課題等について意見を収集する。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 児童・生徒への効果

生徒の授業に対する姿勢、課題レポート、感想文等の継続観察とアンケート結果からいえることは、授業に取り組む姿勢と学習内容への興味関心に関して変化が見られることである。(別紙3アンケート結果参照)

運営指導委員会および研究発表会を通してご指導いただいた点に留意すると同時に、「基礎基本」という観点を念頭に置き、学習内容の精選、核となるポイントを随所で明示しながら授業を実施していった結果といえる。ポイントを絞っての授業や協同学習(課題探究活動)の導入、資料からわかること・考えられること等の問いかけを折々に導入して行ったことが、同じ事象を学ぶにしても知識偏重の授業より興味関心を抱く機会になっていったと思われる。年次を重ねるごとに、地理・歴史的な事柄を深く知りたい、「何故」という疑問と結果に対する関心、調べてみようという意欲の深まりが見てとれ、それを行動に現す生徒も徐々に増えてきている。

また、授業を通して、現在起こっている世界的な事象への関心、ニュースや新聞に目や耳を傾けるようになった生徒が増加していった。このことは、授業時における生徒からの質問の中にも出てきており、興味関心の高まりを感じることができる。生徒たちの間では、「地理基礎」および「歴史基礎」科目の授業は知識を得ることのみが目的ではなく、地図や資料を読み取り、考え、意見を伝え合いながら考える時間としての教科であるとの認識が深まってきている。その上に、2年次以降の専門科目における積極的な授業参加が展開されるようになってきている。

② 教師への効果

3年間、「基礎とは何か」を自問自答し、かつ、教科内討議を通して、教師としての原点に戻って「授業で何を教えるのか」「学習内容で重要なことは何か」「必要な知識とは何か」「生徒に何を考えさせるのか」を考え続けながら教壇に立つことがほとんどであった。これが地理歴史教育とは何かという地理歴史科教師としての基本姿勢を問う時間を常に持つことができた。

授業に関しては、地理専門の教師2名・歴史専門の教師1名で学習内容を話し合った。新科目という点から、学習内容の構成をどうするのかという点に重点を置いた。世界史的な視野・日本史的な視野・地理的な視野の統合という点を考慮しながら、単元構成や学習内容の構成とそのため教材研究を進め、精選した学習内容を生徒に提示していったことは、生徒の興味関心や意欲向上に繋がったという効果はあった。しかしこの科目の授業準備に膨大な時間がかかっている。また、学習内容の充実という点からも、資料収集や精選に関して、テーマに沿った教材探しに多大な時間がかかってしまうのが現実であった。

③ 保護者等への効果

「地理基礎」および「歴史基礎」科目に関心や理解を示してくれている。特に生徒の帰宅後や夕食時等、或いはニュースを聞いている時等、時事に関する会話に授業で学んだことを上らせ、家族で話し合うことが少し多くなったとのことである。父親との会話が増えたという家庭もある。しかし、世界や日本の様子を話している家庭は50%前後である。

「子どもがどのような学習をしているのか」という関心を持って研究発表会に参加する保護者もあり、「担当の先生方が子どもたちのために、学習内容を理解しやすくするための方法を常に考え、力をつけさせようと努力していらっしゃるのととてもよくわかりました」「子どもたちの力が伸びている理由がわかりました」という感想をいただいている。

【分析と考察】

平成24年度・25年度は「地理基礎」「歴史基礎」科目を高校1年生全体で実施した。それに伴い、アンケート内容は23年度のものに修正を加え作成し直し実施した。

3年間を通してアンケート結果から、まず、中学で受けてきた社会科科目に関しては、興味はあるものの得意科目になるまでに至っていないことが示されている。また、アンケート項目2B(表3)からわかるように本校高校1年生は、社会科科目を得意としない生徒が60%前後となっている。学習内容には興味を持って授業に臨んではいるが、結果として不得意科目となった生徒が多い。多くの学習する基本用語を覚えることの苦手意識があったことを表している。このことから中学時代は、興味はあるが成績のために暗記中心の勉強をせざるを得ず、興味関心を基礎知識に結びつけることができなかつたということがいえる。基礎基本となる学習ベースの達成の点から、中学校での社会科科目の授業方法を検討する必要があると思われる。

毎年4月の授業開始時に、地理・歴史の教員で打ち合わせをおこない、世界地図(五大陸)を書かせ、そこに、アメリカ、イギリス・フランス・ドイツ・ロシア・イタリア等のヨーロッパ諸国、オーストラリア、中国、インド、朝鮮半島、日本等の位置関係、さらに海洋名を自分の書いた地図に記入させることを実施している。

五大陸は書けるものの、イギリスの位置が南アフリカ大陸の中に、ドイツはユーラシア大陸の真ん中に、インドは場所不明という生徒が多く、おおよその場所を書けた生徒は一握りである。中学時代に地図と世界諸国の位置関係を身につけてきた生徒の比率は圧倒的に低い。1年間の基礎の授業で、特に歴史は最初に世界の国々の位置関係やおおまかな特色(民族・宗教・自然環境・文化等)の習得を目指さなければならなかつた。

① 「地理基礎」「歴史基礎」についてのアンケート結果(別紙3参照)

- ア アンケート項目1(表1)について、地理歴史ともに「好き」と回答した生徒は増加している。歴史に関しては「好き」が2回目のアンケートを実施した2月の時点で70%近くになっている。
t検定をおこなった結果から、9月時点より2月時点では、 $t(114) = 5.7, p < .05$ で、有意に歴史を好きになっている。
- イ アンケート項目3A(表5)について、中学校の社会科科目の学習内容と比べて、「地理基礎」「歴史基礎」の学習内容への興味関心は高い。知識重視の授業ではなく、日常生活の中での事象を踏まえながら、「考える授業」に臨んでいるからだといえる。
- ウ アンケート項目3B(表6)および4A(表7)について、学習内容が易しいと感じている生徒が60%以上いるということは、この科目の学習内容を「基礎」という観点から精選していった結果といえよう。「歴史基礎」に関しては、授業単元の構成や学習内容にストーリー性を持たせ、イメージし易いよう工夫していった結果といえる。学習内容が易しいと感じることは、理解し易いことに通じ、アンケート項目4A(表7)と関連して、「地理基礎」「歴史基礎」の授業参加意識および興味関心の高まりを示す結果となっている。特に、「地理基礎」に関しては、9月以降に学習した内容で、系統地理的な要素の中に生徒の興味関心に沿って人間生活との関連を重視し、事例地域をより詳細に取り上げた結果であると考えられる。
- エ アンケート項目4C(表9)について、「地理基礎」に関しては、地理領域の資料活用では、9月までに学習していた系統地理的な内容では、自然地形や気候等の事象のスケールが大きすぎ、関心が非常に低かつたと言える。しかし、夏頃を契機に、自らニュースや新聞を活用する機会が増え、さらには夏以降に充実させた課題探究学習や環境地図・東南アジアに関する本やポスターの作成を通じて、資料活用能力が高まつたと考えられる。同時に、国や地域への興味関心が高まり、旅番組や地理に関するバラエティー番組を見た、見ないという会話が聞けるようになった。このことから、授業への興味関心が増し、その中から資料活用能力、思考力が高められたと考えられる。

「歴史基礎」に関しては、アンケート項目4A（表7）の興味関心を感じられない、アンケート項目4C（表9）の知りたいと思わないと回答した生徒は少ない。このことは、前述したとおり知識重視の授業ではなく、日常生活の中での事象に関心を持ち、ニュースや新聞を活用する機会が増えたことを意味している。また、歴史的事象と現在の事象を関連させながら考えるという授業に臨んでいるからおもしろさを感じており、アンケート項目4C（表9）において、歴史的事柄を知りたいと思っている生徒が94%という高い結果となったといえる。

アンケート項目4A（表7）・4C（表9）の結果から、1年間の授業を通して、学習内容への興味関心が継続しているという点、授業がおもしろい＝学習への意欲が向上している点を推察することができ、これは学習内容の充実に繋がった結果といえる。

② 「地理基礎」「歴史基礎」の授業に関する自己診断結果

ア 意欲・関心について

世界の国々の歴史を知るために、地理的な知識は必要だと思うという項目に対して、2月の時点で、肯定的な回答をした生徒が90%近くいる。表10から世界を理解するために地理的な知識を得ようとする意欲・関心が高まったことを示す。 $(t(107)=2.8, p<.05)$ 中学時代の地理的領域の不得意さが多少払拭されてきた証拠である。

イ 思考力・表現力について

「地理基礎」「歴史基礎」ともに現在起こっている世界的な事象を理解するためには、過去の歴史や地理的なことを知っておいた方がいい、知ることはためになると考えている。また、事象の背景や影響を考えていくことが、理解に繋がると感じている生徒が増えてきている。「歴史基礎」に関しては、歴史を学ぶことは、世界が抱えている諸問題を考えるきっかけとなると回答する生徒が多い。

ウ 2年間を通して、生徒の自己診断アンケート結果からいえることは、「積極的に授業への取り組む姿勢」や「授業中および学習内容を理解しようと努力している」項目に関しては、全体の平均値が向上している。また、地理歴史科科目に「興味関心を持ち、面白い」と感じている生徒も増加した。この点に関して、学習内容に関連している可能性があると思われる。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

① 「地理基礎」および「歴史基礎」ともに、「基礎基本」という点に関して『何を教え、何を理解させていくか』の継続検討が必要である。本校では、「基礎」を「ものの見方・考え方」と捉え、ここに焦点を当て「現代の世界・社会を理解するために」学習内容を計画して授業実践をおこない（報告書参照）、そのための『学習内容の明確化と精選』と『提示する資料の精選を心がけてきた。

しかし、「基礎」という概念が様々あり、それぞれの研究立場や思い・考え方等により、「基礎」を捉える方向性が異なっている。何を捉えて「基礎」というのか、生徒に「身につけさせる基礎力」とは、ア) 学習内容構成 イ) 学習方法論 ウ) ものの見方・考え方なのかという検討の必要性を感じている。この点を今後クリアにしていかなければならない。

② 地理領域と世界史領域および日本史領域における学習内容の連携と関連づけは、「地理歴史科科目」にとって必要不可欠である。

また、当然のことながら、学習内容構成面においては、公民領域とも関連させていかななくては、深みのある生きた科目（学問）にならない。それだけに、科目の単元構成や学習内容については、各単元における世界史・日本史・地理領域の学習内容とバランスの問題の検討が必要である。

③ グローバル的な視点とローカル的な視点の両面性から授業を進めることが、事象への理解を深化させていくことになるが、グローバル・ローカルの根拠を常に明確にしていく必要がある。

グローバル的な視点とローカル的な視点の両面性から学習内容の構成を研究する時間、その学習

内容を有効に活かす資料収集・準備に充てる時間の確保は、授業担当者にとって重要な問題となる。

- ④ カリキュラム上に協同学習（課題探究活動）の位置づけとその時間確保の問題があげられる。思考力育成には、じっくり考える時間が必要であり、他者の意見を聞き、自分の意見を伝えた上で、再度、考察していくというプロセスが必要になってくる。また、他者の考えを正確に理解し、自分の考えを述べていくには、基礎的な学力や知識が必要である。中学で既得した知識の個人差をどのように埋めていくかが協同学習では問題となってくる。
- ⑤ 評価のあり方について、検討の必要性がある。

○ 「地理基礎」においては、

課題探究活動において、生徒自身に調べ学習の内容を考えさせた場合、生徒の興味関心は「生活文化」に偏る傾向がある。さらに、最終的には歴史的な要素に興味関心がいくことがあるため、地理的な事象を系統的に取り上げる意義が薄れる可能性がでてくるという問題点があげられる。

○ 「歴史基礎」においては、

中学の歴史、世界史・日本史との関連と地理的視点の組み入れのバランスをどう取っていくのか。世界史Aと日本史Aとの差異やそれぞれの領域での学習観点を明確にしていくことの検討が必要である。時代を限定し、「近現代史・東アジア中心」で実施してきたが、「基礎」という点から、今後も検討していく必要があると考える。

また、事象説明や授業での指導において、担当教員の専門分野により、学習内容にアレンジできるという利点がある。反面、世界史・日本史領域からの視点に偏りが生じる場合が出てくる可能性がある。

○ 3年間の研究開発

研究開発学校の指定は、平成25年度で終了するが「地理基礎」「歴史基礎」の研究を通して得たものは大きいと感じる。

- ① 教育の原点に戻って、「基礎とは何か」「授業で何を教えるのか」「必要な知識とは何か」「生徒に何を考えさせるのか」を問い続けることができた。地理歴史科教師としての基本姿勢を問うという意識改革に繋がった。

具体的には、生徒にとってわかり易い・内容の理解がし易いという教授方法等への工夫に繋がった。

- ② 生徒たちが主体的に学習活動にかかわるようになるという姿勢を感じるが増えた。さらに、授業内や課題研究時の言動が積極的になっていった。これは学習内容の充実ということに繋がったと感じている。
- ③ 学習内容の構成のため、教材研究に時間を費やすことができた。多くの専門書等にあたり、自らの知識を増やし、多角的に事象を思考する機会が増えた。これは教師としての視野の拡大や知識の充足に繋がった。しかし、得た知識を授業という形に落とし込んでいく時に、学習内容の精選・資料収集・プリント作成に多大な時間がかかったことも事実である。